



# 鴻文会会報

創刊号  
 発行・鴻文会  
 753 山口市吉田1677-1  
 山口大学人文学部内  
 電話(0839)22-6111  
 (内線) 808  
 郵便振替口座  
 下関0-15902

## 鴻文会の発足を機会に

鴻文会会長 和田敏英  
(英米文学 第一回卒業)

師走の候となりましたが、皆様にはお変わりなくご健勝のことと存じます。

さて、過ぐる昭和二十八年三月、山口大学文学部では、文学科二十四名及び理学科十五名の第一回卒業生が世に出ましたが、その翌年には早くも文学部同窓会が結成されました。この第一回総会において、文学部部長を同窓会長とする規約も決定され、文学部同窓会は正式に発足いたしました。以後、都合六回にわたる同窓会名簿や会報を発行し、また寄付事業を行うなど、しばらくは順調な歩みを続けておりましたが、前身母胎たる旧制山口高等学校同窓会との合流問題も進捗せず、やがて昭和四十一年の教養部創設やそれに続く大学紛争の影響を受けて、同窓会活動はほとんどまったく停滞いたしました。ただ昭和五十一年三月、学部内に設けた名簿刊行委員会の手によって、「山口大学文学部卒業生名簿」を発刊したにとどまらず。その後、昭和五十三年六月、文学部は改組され、文学科と理学科はそれぞれ人文学部と理学科とに分離独立し、ようやく多年の宿願を果すことができました。

そこで、すでにご案内の通り、去る十月三十一日に開催された文学部同窓会において、文学部同窓会も学部改組の現状に即して発展的に解消され、引き続き、文学科と人文学部、理学科と理学科をそれぞれ別組織とする新しい同窓会が発足いたしました。すなわち、われわれ文学科では、文学科と人文学部とを一本化する新同窓会「鴻文会」がその結成総会において誕生したわけであり

ます。

この「鴻文会」の愛称は、申すまでもなく、山口市の由緒ある鴻の峯にちなみ、大鳥のごとく将来雄飛する期待をこめ、さらに旧制山高同窓会「鴻南会」の一字をも継承することになります。

こうして明春以降、わが鴻文会は人文学部の新入生及び卒業生を年々迎え入れる予定です。山口大学開学以来すでに三十数星霜、ほどなく二千名に達しようとする同窓生が、先輩後輩相擁してこの鴻文会の発足を機会に、今後ますます親睦の度を深め、社会における連帯を強化し、併せて母校の発展のために一致協力したいと念願するものです。

旧制山高、文学部文学科、人文学部、三者の接点にある者として、微力ながら、このたび鴻文会会長に就任することになりましたが、新しい役員体制のもとに活発な諸活動を期しておりますので、会員の皆様におかれましても、積極的にご支援ご鞭撻のほど改めてお願いする次第であります。

# 鴻文会

(文理学部文学科・  
人文学部同窓会)

## 発足!!

昭和五十六年十月三十一日(土)、文理学部文学科・人文学部同窓会・鴻文会が発足した。すなわち、山口大学人文学部講義棟で十四時から行われた文理学部同窓会総会において文理学部同窓会は発展的に解消され、文学科と人文学部、理学科と理学部の別組織の同窓会が発足することとなり、十五時より、同講義棟において



文学科・人文学部同窓会結成総会が行われた。

八木充(国史・第二回卒業)氏の開会の辞、渡辺真治人文部部長の挨拶、議長選出(森田良吉氏、国史・第四回卒業)に続き、後記の会則が検討され、出席者全員の賛同を得て、鴻文会会則が制定された。次いで役員人事に移り、会長に和田敏英(英文・第一回卒業)氏が、ほかに副会長二名、委員十名、監事二名が決った。会場は新しい出発に対する希望と不安が混じりつつも、なごやかさのみち新しい決意のうちに十六時三十分すぎ閉会となった。出席者は六十一名であった。なお引き続き、学内食堂にて、理学科と合同の文理学部同窓生懇親会が行われ、久しぶりの再会に時間を忘れた歓談が続いた。出席者は百六十八名(特別会員二十一)名)であった。

# 鴻文会会則

### (総則)

第一条 本会は鴻文会と称し、事務所を山口大学人文学部内におく。

第二条 本会は会員相互の親睦をはかり、山口大学人文学部の発展に寄与することを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

一、会報及び会員名簿の発行

二、会員相互の連絡、親睦の増進

三、その他必要と認められる事項

### (会員)

第四条 本会は次の会員をおく。

一、正会員 山口大学文理学部文学科、人文学部卒業生及び文学専攻科修了生

二、準会員 山口大学人文学部学生、文学専攻科学生

三、特別会員 山口大学文理学部文学科教官、人文学部教官及び旧教官

### (会費)

第五条 本会の経費は、会費、寄附金、その他の収入をもってあてる。正会員は終身会費五千円を納入する。準会員は入学時において上記の終身会費を納入する。

### (役員)

第六条 本会は次の役員をおく。任期は四年とし、再任を妨げない。

一、会長 一名

二、副会長二名

三、委員 若干名

四、監事 二名

第七条 役員は次の職務を行う。

一、会長は本会を代表して会務を総括し、副会長は会長を補佐する。

二、会長、副会長及び委員は委員会を組織し、会務を処理する。

三、監事は会務及び会計の執行を監査する。

第八条 委員会は名誉会長に山口大学人文学部部長、また会務運営のため幹事若干名を委嘱することができる。

### (総会)

第九条 本会の総会は正会員をもって構成し、四年ごとに開催する。総会は次の事項を審議し、出席者の過半数をもって議決する。

一、事業の報告

二、会計の報告

三、役員を選出

四、会則の改正及びその他の重要事項

### (支部)

第十条 会員は本会の事業を推進するため、必要に応じ支部を設けることができる。

附則 この会則は昭和五十六年十月三十一日より施行する。

鴻文會役員

(昭和五十六年十月三十一日選出)

**会長**  
和田敏英 (英米文学、第一回卒業、山口大学人文学部)

**副会長**  
滝本龍也 (社会学、第三回卒業、山口家庭裁判所)

大塚博久 (中国哲学、第四回卒業、山口大学教育学部)

**委員**  
渡辺澄利 (西洋哲学、第八回卒業、小野田高校)

大野光生 (中国哲学、第四回卒業、宇部中央高校)

八木 充 (国文学、第二回卒業、山口大学人文学部)

和田修治 (東洋史学、第五回卒業、山口県教育委員会)

原田哲矢 (西洋史学、第八回卒業、山口中央高校)

松崎孝夫 (社会学、第十回卒業、山口マツダ)

河口 正 (国文学、第二回卒業、宇部中央高校)

藤満 通 (中国文学、第六回卒業、山口中央高校)

木村愛昭 (英米文学、第一回卒業、山口中央高校)

伊藤義彦 (ドイツ文学、第二回卒業、近江屋寝具店)

**監事**  
森田良吉 (国史学、第四回卒業、山口高校)

行村和男 (英米文学、第四回卒業、山口相互銀行)

(昭和五十六年十一月二十一日委嘱)  
**名誉会長**  
渡辺真治 (山口大学人文学部長)

**幹事**  
岡光一浩 (ドイツ文学、第十四回卒業、山口大学人文学部)

添田建治郎 (国文学、第十七回卒業、山口大学人文学部)

**鴻文會活動日誌**  
「文学科及び人文学部同窓会」  
発起人会  
(五十六年九月二十二日)

文学部同窓会を發展的に解消し、「鴻文會」(仮称)結成を呼びかけることに決定。出席者十六名

「鴻文會」結成総会  
(五十六年十月三十一日)

鴻文會の結成を満場一致で承認。引き続き、会則案の検討を行い、役員を決定。出席者六十一名

第一回「鴻文會」役員会  
(五十六年十一月二十一日)

名誉会長を現人文学部長渡辺真治氏に、幹事を学部内の上記四名に委嘱。

出席者十六名  
なお役員会では会の具体的な今後の活動方針の検討が行われ様々な問題が討議され、決定された。会計年度は四月一日から



翌年の三月三十一日までとし、今年度は中途であるが、初年度とし、四年に一回の総会にて報告することとなった。会報は同窓生間の連絡を密にする意味でも、なるべく頻りに、早いうち発行し、また名簿は来年夏の刊行を目標として住所等の確認をすることが決った。他にも総会の日程などが話題にのぼったが、今回の役員会は初めてのこともあり、大枠の検討に終始し、大半は次回役員会への引き継ぎとなった。

文学部同窓生懇親会

総会終了後、大学構内の学生食堂で、文学科、理学科の同窓生懇親会が行われた。文学科六十六名、理学科八十一名、計百四十七名の同窓生が相集い、恩師の先生二十一名を迎えて、遅い時間からであったが旧交を暖

めた。こんなにも多勢の同窓生の集まりは初めての試みであり少々不安はあったが、やはりそれは同窓生、全く見知らぬ者同志が母校が同じというだけでこんなにスムーズに話が花が咲くとは!! マイクの声もかき消されるほど和気合い合いの歓談の席であった。同窓生とはこんなにもいいものか、ともかく大成功の懇親会であった。

人文学部研究室紹介

●今回は学生数と教官名をお知らせします。

哲学・倫理学 (学生数 三十七)

教授 武宮 諱 講師 松本正男  
教授 遠藤 徹 講師 村上勝三

中国哲学 (学生数 十四)

教授 内山俊彦 助教授 山田和夫

日本思想史学 (学生数 三十)

教授 山田 洸 講師 高島元洋

美学・美術史 (学生数 二十)

教授 石原達二 講師 奥津 聖

国文学 (学生数 三十五)

教授 八木 充 助教授 田中誠二

東洋史学 (学生数 三十四)

教授 畑地正憲 講師 山本英史

西洋史学 (学生数 三十二)

教授 渡辺真治 助教授 尼川創二

考古学 (学生数 三十)

教授 鈴木博司 助教授 近藤壽一

社会学・社会心理学・社会人類学 (学生数 七十)

教授 木下謙治 助教授 小谷典子  
助手 中西吉則

教授 大本晋龍 助教授 小川全夫

教授 鈴木満男 講師 佐々木 衛

国語学 (学生数 三十四)

教授 関 一雄 助教授 添田建治郎

国文学 (学生数 四十二)

教授 水本精一郎 助教授 石井 大

中国語学・中国文学 (学生数 二十六)

教授 福島吉彦

教授 岩城秀夫 助教授 阿部泰記

英語学 (学生数 三十二)

教授 山本和之 講師 鈴木重樹

英米文学 (学生数 三十五)

教授 和田敏英 助教授 山内正一

ドイツ語学・ドイツ文学 (学生数 十六)

教授 中野安久 助教授 岡光一浩

フランス語学・フランス文学 (学生数 二十四)

教授 末松 寿 講師 井上三朗

言語学 (学生数 二十八)  
教授 柏木 英彦 助教授 平野草織

学生総数五三八、教官数四三(昭和五十六年十二月一日現在)。

会員の声

森田良吉(国史・第四回卒)

新発足の鴻文会会則によれば、総会の開催を四年に一度と定めています。四年間とは少々息の長い感がありますが、最初の四年が鴻文会にとって正念場だと思います。どんな活動をするか、多くの課題を抱えての出発だと思えます。

鴻文会結成の総会で、「会の活動は活発に、伝統のある他学部同窓会に劣らぬように、思い切ったことを行って貰いたい」との要望がありました。恐らく有名無実化し、冬眠状態にあった旧文学部同窓会に対する痛烈な批判でもあり、また鴻文会発足に当って、期待感に燃える叱咤激励の言葉だとも受けとめました。

どんな姿に鴻文会を完成させるか、衆智を結集して考えたいものです。会員の色々な声を、また奇抜なアイデアを、なお様々な意見を、会長以下各役員は謙虚に受けとめる情態にあるうかと思えます。要するに会員相互に切磋琢磨の鴻文会でありたいものです。

満を持して

立川和正(西哲・第八回卒)

毎日新聞に「花なき山の」と題する山大経済学部の歴史が連載され、その後を受けて、教育学部の「樞野の流れ」が連載されている。それを見るたびに、我等の文学部はどうなっているかといつも思っていた。

今回の再発足の通知を受けて「待ちもうけたり」の感ひとしお

そも同窓会なるものは、それがなくとも生きる上では何の支障もない。従って誰かが猫の首に鈴をつけるだろう、になり易い。しかし、それがなきに等しいのはもの悲しくうら淋しいものだ。実感として年来そう思い続けて来た。

それだけに、今回の再出発には「満を持して」の思い入れを持って

願わくば、執行部諸氏の「強引にして、厚釜しき」リードを。あの再発足を機に、わが西哲も二十八日同窓会を再発足し、「かめふく」にて氣勢をあげます。どうぞ、パリパリやっつけてください。

研究室同窓会だより

西洋哲学科同窓会

西洋哲学科同窓会が去る昭和五十六年十一月二十八日(土曜日)午後五時半より湯田の「かめふく別館」で田中晃先生をかねておこなわれ、九時前に盛會裏に終了した。

出席者は第二回(昭和二十九年卒)〜第十五回(昭和四十二年卒)の卒業生十四名であった。

独文科同窓会

小さな単位ではしばしば各地で行われていた同窓生の集まりも、やっと全体でもつてきました。十月三十一日(土)、鴻文会総会、懇親会の終了後、遅い時間ではあったが、湯田の山泉荘で

第一回の同窓会を行った。山口・九州を中心に遠くは埼玉、愛

知から二十六名もの卒業生が集まり、恩師の先生四人を囲んで久しぶりの再会を楽しんだ。この会のなかで特に印象的だったのは早い時期の卒業生の興奮度であった。学生時代の写真が登場し、ドイツ語の歌がとびだしその興奮といった筆舌に及ぶがたい、本当に良き時代であったことがしのばれた。山口はおよそ三十年ぶりという卒業生もあり、後日、「後河原を訪ね、わずかに残る三十年前の面影をしのんで帰路につきました」というお便りをいただいた。なお独文科の同窓会は鴻文会の総会の行われる時に定期的に、それ以外には会長(第一回卒業、田中宏芳氏)一任となった。(雰囲気としては二年に一度の感が強い)やっとならした同窓会、独文科卒業生よ、もっと集まれ!! 語り合おう!!

通信欄

鴻文会の発足にともない、卒業生の交流に少しでも資すればと、会報を発行することになりました。創刊号をお送りいたします。次号からは、卒業生の皆さんからの近況や思い出の掲載、人文学部の研究室訪問も企画してあります。卒業生の皆さんの相互の交流を一層高めることができれば幸いです。つきましてはお願いがあります。

一、住所の変更は必ずお知らせ下さい。

一、鴻文会ならびに会報に通信をお送り下さい。近況、思い出、研究室単位同窓会活動、何でも結構です。ご意見も寄せ下さい。

一、会費(五、〇〇〇円、郵便振替口座下関〇一五九〇二)をお送り下さい。鴻文会の発足は借金から始まりました。豊かな活動を裏づける共有の財政の確立が急がれています。

一、同窓会名簿の発行を予定しています。前回の名簿を改訂して、正確で実用性のあつたものを企画しています。入用のご希望の有無をお知らせ下さい。通信は振替用紙の通信欄をご利用下さい。卒業生の皆さんのご協力を宜しく、お願いいたします。

文学部文学科卒業生数

(昭和五十六年十二月一日現在) 一八二六名

(研究室内訳)

|             |     |
|-------------|-----|
| 哲学・倫理学      | 一四八 |
| 中国哲学        | 六三  |
| 社会学         | 二九一 |
| 東洋史学        | 一七七 |
| 西洋史学        | 一三一 |
| 国語学・国文学     | 一六五 |
| 中国語学・中国文学   | 七六  |
| 英語学・英米文学    | 三六六 |
| ドイツ語学・ドイツ文学 | 一〇八 |

師走、文字通り師走的内容となり、皆様のお気に召すかどうか大変不安ですが、ともかく会報創刊号をお送りします。この会報を手に入れ、かつての青春を謳歌した学生時代を、母校を友人を、そして山口を想い起こされ、いつまでもあの良き時代を大切にしてください。これからは、そして同時に、これからも後輩たちのために、いつまでも母校を愛していただきたく思います。

会報の役割は先ずなによりも会員間の連絡を密にするところにあると思います。どうか我々の会報を、会員一人一人のものとするために忌憚のない御意見・御要望をいただきたいと思えます。

(〇)

編集後記

やっとなら、鴻文会会報の創刊号を皆さんにお届けします。幹事に委嘱されたものの、事務能力は全くダメ、会報の編集にいたってはなおさらのこと、多くの人のご迷惑をおかけしました。とりわけ、「雑学の大家」として自他ともに認められている森田良吉氏(国史学第四回卒業)には、原稿から印刷屋の紹介まで、あらゆる面でお世話になりました。ここに、めでたく創刊号がお手元に届けられるのは、全く森田氏のご協力のおかげです。

さて、幹事に四名のものが委嘱されましたが、何分、不慣れなものばかりなので仕事は万手際よく片づくというわけではありませぬ。会員の皆様のご指導・ご鞭撻、そして、ご協力を宜しくお願いいたします。(S)